

# 知識 探訪

## 多民族社会の横顔を読む



【第25回】

西芳実(にし・よしみ)

(東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム助教授)

## マレーシアとインドネシアの微妙な関係

クアラルンプールの街角でマレー系の人とすれ違ったら、それはマレー人ではなくインドネシア人かもしれない。在マレーシア・インドネシア大使館の調べでは、マレーシアに合法的に滞在しているインドネシア人は120万人いる。非合法滞在者も含めればマレーシアにいるインドネシア人は200万人に上るといわれる。クアラルンプールで「マレー人の台所」として知られるチョウキット市場周辺は、地元の人にインドネシア人街として知られ、インドネシアの雑誌や新聞が何種類も売られている。

何世代も前にインドネシアから移住してマレーシア国民になっている人も含めれば、「インドネシア系」の数はもっと増える。ナジブ首相も自身の血統をマカッサル出身のブギス人と述べている。

ところが、同じ文化圏に属しているものの、マレーシアとインドネシアでは互いの評判が悪い。マレーシアでは、インドネシア人といえば低賃金労働者や犯罪者というイメージが強い。他方、インドネシアでは、インドネシア民謡を国歌「ヌガラク」にしたり、バリの伝統舞踊をマレーシア観光の宣伝に使ったりしているとして、マレーシアをインドネシア文化の盗人と非難した。最近ではマレーシア人雇用主によるインドネシア人家事労働者に対する虐待が両国の外交問題にも発展した。

インドネシアでマレーシアの評判が悪い背景の一つにアチェ難民の問題がある。スマトラ島のアチェ州では、自由アチェ運動(GAM)によるアチェ分離独立運動が続いており、インドネシア国軍との戦

火を避けてマレーシアに避難するアチェ人が増加した。しかし、マレーシア政府はこれらの人々を難民と認めなかった。マレーシアが「難民の地位に関する条約」を批准していないことに加え、インドネシア政府がアチェ問題を国内問題として政治的迫害を認めない以上、マレーシア政府はアチェ人を特別扱いできないためである。不法入国やオーバーステイのアチェ人はインドネシアに強制送還されることになる。



マレーシア国内の建設現場などでは、インドネシア人労働者の姿が目立つ

ただし、自然災害への人道支援では国境を越えた支援が可能になる。2004年スマトラ沖地震津波の際に、マレーシアはアチェからの避難民3万5000人にマレーシア滞在を許可する被災者証明証を発給した。難民扱いができなくても、裏技を使いアチェの人々を救済したのである。

両国の関係改善は映画の中で一足先に試みられている。2009年公開のマレーシア映画『切手』(stem)では、お宝探しをするマレー人、華人、インド人のチーム・プレーに参加してインドネシア人青年が重要な役割を果たしている。ナジブ政権が民族融和を目指して打ち出している「1マレーシア」政策の下で、マレーシアにおけるインドネシア人に対する印象も変わりつつあるようだ。

### 【プロフィール】

1971年、東京都生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修士、学術博士。1997～2000年にインドネシア・アチェ州シアクアラ大学に留学。専門はインドネシアの地域研究。多言語・多宗教社会における災害や紛争への対応過程について研究する。共著に『インド洋海域世界：人とモノの移動』(言叢社)など。